

# 1930年代のデューイにおけるコミュニティ・スクールの構想

## ——活動的な学習実践の創造——

上野正道

はじめに

本論文は、1930年代のジョン・デューイ（John Dewey, 1859-1952年）が探索した学校改革の構想を、活動的なコミュニティ・スクールの実践の角度から考察し解明することを目的とする。コミュニティと活動を主体とする彼の学習の構想に関しては、これまでも数多くの先行研究の中で考察されてきた。しかし、それらの多くは、1890年代のシカゴ大学実験学校での試みや、その実践を基盤にして書かれた『学校と社会』（1899年）<sup>1</sup>を研究対象にするものであるか、あるいは、1910年代の『民主主義と教育』（1916年）<sup>2</sup>を取り上げるものである傾向が見られた。また、1930年代の時期のデューイの学校論や教育論としては、彼の代表的著作のひとつである『経験と教育』（1938年）<sup>3</sup>や、雑誌『ソーシャル・フロンティア』に掲載した多くの小論での活動が知られている。

だが、この時期のデューイは、これらの著書と論稿以外にも多数の論文や活動を展開し発表していた。そこで本論文では、これまでの先行研究ではあまり注目されてこなかった30年代の彼のいくつかの論文に光を当てて、彼のコミュニティ・スクールの構想を解明することにする。1930年代のデューイは、19世紀末以降の自身が主導してきた進歩主義学校の実践を改めて捉え直し、コミュニティの学習を基軸とした新しい学校を創造することの必要性を積極的に訴えた点で重要な意味を持っている。

本論文はまず、30年代のデューイの論文の中から、活動的な学習とコミュニティに関する彼の論稿を取り上げて検討を行う。特に、進歩主義教育の実

践を協同的な学習活動を基盤とした学校の角度から再考し位置付け直したことに注目する。次に、1929年に彼が70歳を迎えたのを機に開催された祝賀会で講演された内容に光を当て、コミュニティの学習を主体とした彼の哲学とその実践的影響について考察を加える。さらに、デューイの教え子であるエルシー・クラップ (Elsie Ripley Clapp) が推進したコミュニティ・スクールを検討し、活動的なコミュニティの学校の様態を検討する。30年代のデューイが構想した学校改革の実践を知る上で、クラップによる試みは重要である。ここでは、クラップの著書『コミュニティ・スクールの活動』(1939年) を考察対象に据えて、デューイのコミュニティ・スクールの構想の実践的貢献について明らかにする。

## 1 活動的なコミュニティを基盤とする学習

1930年代のデューイは、進歩主義学校が促した改革の意味を吟味し、その実践を捉え直す試みを展開している。「進歩主義学校をなぜ主張するのか」(1933年) という論稿の中で、彼は、伝統的教育における学習が、読み、書き、算の「書物学習」を中心に組織されてきたと指摘する。彼によれば、その根底には「社会の側面」よりも「個人の側面」を強調する民主主義の伝統的観念が潜んでいたと言う。そこでは、民主主義の教育は、子どもたちの現在の生活や経験の拡充に主眼が置かれるよりも、「確実な基礎学習」を提供して、将来成人になったときにそれを自由に使えるように「生活における平等のスタート」を保障するための準備に置かれていたと述べる。

デューイは、進歩主義学校がこの伝統を批判して、教科相互の関連や、教科と学校外の活動との相互関係を重視した方法を開発し、子どもたちの「成長」に関わる「生命」全体を見据えた新しい学習様式を導入したことを評価する。彼に従えば、新しい学校では、「同じ時間に同じ教科書から同じ課業の同じ箇所」を学び取らせるために「用いる道具と教材を画一化する」ことが目的とされるのではない。むしろ、「大人であれ、子どもであれ、作業する者がグループの中で話し合い相談し合い活動する」ことによって、「変化」

と「実験」に満ちた「実験的開拓者」としての教室の創造が奨励されている。彼は、「活動」や「議論」や「協同」が進歩主義学校の学習の鍵概念を構成していることを擁護している<sup>4</sup>。

彼はまた、「学校の『飾り』を廃止すべきか、否」（1933年）の中でも、進歩主義学校の革新的な実践の試みを尊重する論調を展開している。彼の発言は、大恐慌に直面した社会状況下で、過去30年から40年という期間をかけて築き上げられた進歩主義の豊かな教育実践や教材が攻撃の対象とされ否定されることの危機に向けられている。具体的には、公共医療サービスや、木材、道具、家庭科、音楽、図画、演劇といった学校における多様な活動が、「経済的利益」を優先させる学校政策の観点から、「飾り（frill）」として扱われ、学習時間を削減されていることに対して憤りを表したものであった。そして、子どもたちの将来の利益をもたらす豊かな経験と活動に代わって、伝統的な教育に見られる従順で受動的な学習が復活することの危険性を批判した<sup>5</sup>。

全米教育研究協会（National Society for the Study of Education）の雑誌に、デューイは「活動の動向」（1934年）という論稿を発表している。彼は、「活動」という言葉の示す意味があまりに広く、「単なる活動一般の概念」としては「いかなる明確な教育的価値」も持たないと論じている。すなわち、受動的で「『内的な』行為」を否定して、顕在的に目に見える形の「身体的活動」を強調するものもあれば、「具体的で明白な結果」を追究して「教育的な『目標』と『目的』」に適用しようとするものもあれば、「子どもの欲求、選好、経験」を尊重するものもあれば、「社会的な価値と要請」を尊重するものもあると言う。そこで必要なのは、「多様な活動様式を多様な観点から区別して研究する」ことであり、教育実践にどのような「活動の原理」を導入するのかを考察することであると主張されている<sup>6</sup>。

デューイはまた、1934年の7月に南アフリカのケープタウンとヨハネスブルグで開催された教育会議の演説で、活動とコミュニティに根差した学習環境を創造する必要性について話している。新教育協会（New Education Fellowship）が後援するこの会議に、カーネギー財団の支援で出席し演説した

デューイの講演内容のうち、「学習とは何か」と「活動における成長」は、全米教育委員会（National Commission of Education）の創立者の一人で南アフリカの教育に熱心に取り組んだエルンスト・マレルブ（Ernst Gideon Malherbe）の編集による『変化する社会における教育的適応』（1937年）の中に取められた。

「活動における成長」の中で、デューイは、活動に結び付いた「子どもの自然的発達の中の三つの段階」について語っている。第一は、「結果に関係しない活動」であり、生まれてから最初の数年間は「活動それ自体が満足を与える」ものになると述べる。例えば、幼い子どもの水彩絵の具を例に見ると、子どもは実際の対象物の構成比率や、自分が描いた絵の作品や結果に固執する以上に、「自身の中で起きている事柄を表現する過程」に集中していることが理解できると言う。「活動は、子どもの感情を喚起し、彼らの想像的な生活を自由にすることが必要である」と見なされている。第二は、「結果による活動の統制」である。子どもたちは、「活動の結果」を意識して、「成功に向けて活動を方向付ける」ようになると言う。そこでは、「完成」や「目的」とされるものが芽生えてくることになる。したがって、教師は子どもが成就したいと思う事柄に気づき援助するのでなければ、この時期の子どもたちは徐々に興味を失い、学習活動から離れていくであろうと話している。第三は、「シンボルの活用」である。「シンボル」の世界は、人間が話し始めると同時に導き入れられるが、読むことの学習において意識的に活用される、とデューイは考えている。それはまた、「人間の意識的で知性的な発達」にも結び付けられるものであると捉えられている。デューイは、これらの類型に「明確な区分」が存在するのではなく、それぞれの「要素」を必要とするものであると述べる。その中で、教師は子どもの「支配的な傾向」について適切に観察し理解し援助することが必要であると主張している<sup>7</sup>。

「学習とは何か」では、「学習」を「作用する活動の要請を満たすのに必要とされる力の行使の産物」として解釈している。すなわちそれは、「現実の必要性を構成するある方向付けにおける内的な力」を表す活動であり、「教材

と対象の存在、あるいは衝動を実現する手段」であり、特に幼児期においては、「外的であるよりも内的である」ところの「成功の基準」であると言う。彼によれば、「学習に基づく真の学校」の実現は、学習者が自らの力を理解し活用することを学ぶことを通して、個人の性向が次第に開示され移行し、豊かな社会参加へと誘うような「コミュニティ」の創造にあると述べている<sup>8</sup>。

## 2 デューイの学校改革構想の実践的影響

1929年10月20日、デューイは70歳の誕生日を迎えている。29年の2月に、ニューヨーク市教員組合の委員長であるヘンリー・リンヴィル (Henry Richardson Linville)<sup>9</sup>が主導して、デューイの70歳の誕生日を祝福して彼の多彩な活動を称える盛大な祝賀会を開催することを提案した。4月19日にはニューヨークのタウン・ホール・クラブ (Town Hall Club) で昼食会が開かれ、23人の出席者によってこの企画が承認された。そして、祝賀会の企画を司る全国委員会 (The National Committee for the Celebration of the Seventieth Birthday of John Dewey) が組織された。

全国委員会の委員長にはコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ (Columbia University Teachers College) で同僚のウィリアム・キルパトリック (William Heard Kilpatrick) が選ばれ、幹事にはリンヴィルが選出された。委員を務めたのは、サーモン・レヴィンソン (Salmon O. Levinson)、チャールズ・ビアード (Charles Austin Beard)、ジェイムズ・タフツ (James Hayden Tufts)、ジェシー・ニューロン (Jesse H. Newlon)、アルバート・バーンズ (Albert Barnes)、ウォルター・リップマン (Walter Lippmann)、ノーマン・トーマス (Norman Thomas) など、デューイと親交が深く、アメリカ社会を主導してきたメンバーたちである。また、進歩主義学校を先導した教育関係者からも、グリニッジ・ヴィレッジでプレイ・スクール (Play School) を発足し、それを母体としてシティ・アンド・カントリー・スクール (City and Country School) のアヴァン・ギャルドによる教育実践を展開したキャロライン・プラット (Caroline Pratt)、教育研究者としてプラットのプレイ・スクールを

拠点に教育実験研究所 (The Bureau of Educational Experiments) を設立し、バンク・ストリート・カレッジ (Bank Street College) を創設したルーシー・ミッチェル (Lucy Sprague Mitchell)、オーガニック・スクールのマリエッタ・ジョンソン (Marietta Johnson)、ドルトン・プラン (Dalton Laboratory Plan) を開発し、ドルトン・スクール (Dalton School) で実践を展開したヘレン・パークースト (Helen Parkhurst)、ティーチャーズ・カレッジ教授で社会科のカリキュラム開発に従事したハロルド・ラッグ (Harold Rugg) などが選ばれている。

10月18日の夕刻から19日にかけて開催された祝賀会は、三つの分科会から構成された。それぞれの分科会の主題は、第一部の「デューイ教授の教育への貢献」、第二部の「デューイ教授への哲学への貢献」、第三部の「デューイ教授の社会福祉への貢献」とされた。第一部と第二部はホレス・マン・スクール (The Horace Mann School) の講堂で行われ、第三部は昼食会と合わせた形でアスター・ホテル (Hotel Astor) で開催された。昼食会には、政府や市の役人から学者、教育関係者、同僚、友人、彼の学生に至るまで、2300人もの人たちが出席している。

学校教育に対するデューイの貢献をテーマとした第一部は、ニューヨーク州立大学の教授でニューヨーク州の教育委員を歴任したフランク・グレーヴス (Frank Pierrepont Graves) が司会を務め、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (University of California Los Angeles) のアーネスト・ムーア (Ernest Carroll Moore)、ティーチャーズ・カレッジ教授のニューロンと、イザック・キャンデル (Isaac L. Kandel) が講演を行った<sup>10</sup>。

ムーアは、ロサンゼルス・ノーマル・スクールの校長を務めた後、1919年に UCLA の教育学部の教授兼理事となり、1929年から31年にかけて副学長、そして31年から36年の間は学長を歴任している<sup>11</sup>。「ジョン・デューイの教育理論への貢献」と題された講演では、デューイは「世界でこれまでに知られている教育についての思想家の中で最も深遠で見識の深い思想家」であると話している。ムーアは、世界中の多くの「哲学者」の中でも「教育哲学者で

あった哲学者はほんの僅かであったのは何故だろうか」という問いを提起している。そして、この観点から捉えるならば、デューイは、ソクラテス、プラトン、ロック、ヘルバルトに並ぶ「五人の教育哲学者」として名を連ねるだろうと述べている。

ムーアによれば、「教育哲学」におけるデューイの貢献は、「すべての学校は活動学校 (activity school) でなければならない」という原理を導入したことにあると言う。そこでは、「教育目的」は「世界への意図的な働きかけの過程を生活の過程にする」こととして理解され、「知性」は「名詞ではなく動詞としての活動すること」であると捉えられている。新しい学校実践を特徴付ける原理は、「構成的活動」、「探究」、「証拠の扱い」、「物事の証明」、「援助し援助されること」、「協同」、「決定すること」、「役割を果たすこと」といった概念であると主張されている<sup>12</sup>。

ニューロンが行った講演の題名は、「ジョン・デューイの学校への影響」というものであった。ニューロンは、コロラド州デンバー市の教育長として「デンバー・プログラム (Denver Program)」と呼ばれるカリキュラム改訂に着手し、1924年から25年にかけて全米教育協会 (National Education Association) の会長を務めた後、1927年に教育行政学者として母校のティーチャーズ・カレッジの教授に加わり、コロンビア大学の実験学校のリンカーン・スクール (Lincoln School) の校長にも就任した<sup>13</sup>。

講演の冒頭でニューロンは、「今日教育に到来している変化は重力の中心の移動」であり、それは「コペルニクスによって天体の中心が地球から太陽に移されたのと匹敵するほどの変革であり革命であり」、このたびは「子どもが太陽となり、その周囲を教育の様々な装置が回転することになる」という『学校と社会』の有名な一節を引き合いに出しながら、デューイの教育理論における四つの基本原理を指摘している。すなわち、「教材が求めるもの」よりも「子どもの成長」を重視して、「教師の注意」を「子どもの本性と必要性」に向けたこと、教育を「経験する過程」として捉えたこと、「カリキュラム」の構成原理を「学習者の外部にある何か」ではなく、学習者の学びの事実と

一致し自己の成長へと結び付くような「興味」と「努力」に置いたこと、「社会的制度」としての「学校の新しい理論」を提唱したことである。

その上でニューロンは、デューイの理論が学校教育に果たした実践的転換を七点指摘している。第一の転換としてニューロンが取り上げるのは、「カリキュラムが革新的に修正された」ことである。学校は「社会的過程」と「学習者の必要性」に密接に結び付いた場所とされ、「新しい教材と活動」が導入されたと言う。

第二は、「生徒の活動」が強調され、「方法における実験」が活発化したことである。ニューロンによれば、「生徒たちが教科書の奴隷になることから解放され、彼らが問題を学習し、深く興味を持ったプロジェクトに取り組むにあたって、数多くの著書や多彩な教材が導入された」ことが最も重要な変化だと見なされている。そこでは、「フィールド調査 (field trip) が不可欠なもの」になっただけでなく、「図書館がすべての良い学校を統合する場所」として機能したと述べられている。

第三の転換として、「私たちの学校を特徴付ける明確な自由」と「生徒たちによって遂行される多彩な活動」が挙げられる。この中で、「生徒による学校自治への参加」は重要なものとして理解されている。

第四は、「道徳教育」に関わる事柄である。ニューロンは、「私の判断では、他のどの分野よりもデューイが偉大な影響力を発揮した」と話している。彼は、デューイの『教育における道徳原理』(1909年)<sup>14</sup>の中から「教授と徳性の断絶は学習と活動の分離の結果である」という文章を引用しながら、「教育の主要な目的のひとつ」は「個人が反省的思考 (reflective thinking) を通して自らの人生を社会的に有用な路線に方向付けていく」ことであると述べている。

第五に、ニューロンは「宗教教育」への影響について話している。すなわち、多くの教会や、Y.M.C.A. と Y.W.C.A.、それ以外の宗教機関で、「宗教教育のプログラム」が導入されたことである。

第六は、「学校建築と施設」における貢献であると捉えられている。「現代



の学校」は、「講堂、図書館、体育館、店舗、美術室、調理室、社会室、多かれ少なかれ性質において専門分野に適合した多くの教室」を備えており、「学校建築」はデューイが主張したところの「実際の萌芽的なコミュニティ (embryonic communities) としてのハウス・スクール (house schools) であるように設計されている」と言う。

第七の転換は、「行政」と「指導」についての影響である。ニューロンによれば、20世紀初頭において「優れた公立学校の行政システム」は、「教師の声をほとんど聞くことがない慈悲深い専制支配」であり、「指導要領やあらゆる種類の手続きは行政官による命令によって決定されていた」と話している。しかし、ニューロンによれば、「教師は新しい地位を獲得した」のであり、「行政における民主主義」、「行政に対する教師の参加」が「今日のスローガンになっている」と評価している。進歩主義の学校システムでは、「教師」は「カリキュラムの作り手」であり、「教育実践の決定」を行う者とされている。ニューロンは、学校の中で実際に「カリキュラムの絶えざる改訂のプログラム」が着手され、そのための委員会が委員長を含めて全員が教師からなるメンバーで構成されたことを積極的に支持している。教育行政学者のニューロンが、デューイの実践的貢献にこのような学校行政に関する内容を取り上げているのは重要である。

ニューロンは、これらの学校教育における変化が「他のどの教育哲学者よりも自らの時代に影響を及ぼした創造的な思想家であるデューイの影響」に帰するものだと述べる形で、講演の最後を締め括っている<sup>15</sup>。

キャンデルによる講演は、「ジョン・デューイの外国の教育への影響」という主題であった。キャンデルによれば、「座席や書物による作業や、教師の命令への同化としての学習」に代わって、新しく要請されている学習は「生徒の興味を通して学ぶ」ことであり、「協同的なコミュニティ」としての学校づくりが求められていると言う。キャンデルは、教育の基本原則として、「子どもの個性の尊重」、「社会的制度としての学校」、「学習過程としての活動」の三つを取り上げて、その実現のために「学校の壁が壊され」、「保護者と教

師の密接な協同」の上に実践が築かれるようになったことを評価する。彼はまた、教育に関するデューイの著作が、フランス、ドイツ、ロシア、ハンガリー、ブルガリア、ギリシア、イタリア、スペイン、スウェーデン、アラブ、トルコ、中国、日本などで翻訳されていることに注意を向けて、諸外国におけるデューイの教育理論の影響力の大きさを指摘している<sup>16</sup>。

分科会の第二部では、ハーバード大学教授のラルフ・ペリー (Ralph Barton Perry) が司会を行い、シカゴ大学のジョージ・ハーバード・ミード (George Herbert Mead) や、コロンビア大学のハーバート・シュナイダー (Herbert W. Schneider) らが講演をした。

ミードの講演は、「アメリカ的背景におけるロイス、ジェームズ、デューイの哲学」という題が付けられた<sup>17</sup>。ミードは、イングランドとアメリカの歴史的背景を比較して、イングランドが伝統的な価値観や古い秩序に対する説得と闘争の中から発展してきたのとは対照的に、アメリカ社会は「ピューリタニズムの哲学」と「タウン・ミーティングの民主主義」に基づいて開拓が進められてきたと指摘する。ミードによれば、デューイが「観念論」を脱して「道徳的行為の心理学的分析」へと転換したのは、こうしたアメリカ的事情を反映して、「様々な目的の葛藤の中に問題を見出す」のではなく、「行為における個人の直接的な道徳問題」として、「知識の機能を活動の中で」理解することに由来していると述べている。「目的」を「手段」との関連から捉え、「道徳的、知的仮説についての知性的検証」を「それが機能する」かどうかで考えるデューイの哲学は、「アメリカのコミュニティ精神の中では暗黙の知性として熟達した方法」であり、「最も深い意味においてジョン・デューイはアメリカの哲学者である」とミードは話している<sup>18</sup>。

昼食会を兼ねた第三部では、ジェーン・アダムズが「ジョン・デューイと社会福祉」という題名で論文を発表し、ジェームズ・ロビンソン (James Harvey Robinson) が「ジョン・デューイとリベラル思想」という講演を行った。

アダムズは、自らが1889年にシカゴに開設した社会福祉的なセツルメントのハルハウスにおいて、デューイが委員会の理事を務めたことを紹介しながら

ら、デューイがほかの多くの理事と異なって、セツルメントの活動に非常に熱心であったことを回想している。彼女によれば、毎週日曜日の午後にハルハウスのセツルメントに年配の人たちが集まって哲学や宗教について話し合う、ジュリア・ラスロップ (Julia Lathrop) が開いたプラトン・クラブ (Plato Club) という会合にデューイが積極的に出入りしたことに触れ、ときにはひどい嵐のために「変人」とされるような人しか出席しなかったような日でも、デューイが参加しに来たエピソードを紹介している。

その上でアダムズは、デューイが同じシカゴで実験学校を開設したことについて触れている。そして、デューイが主張した「教師と子どもの自由と信頼の環境」や「教師と生徒がともに生活を送る上での共有された関心の環境」の創造は、社会福祉における「ソーシャル・ワーカーとクライアントの関係と明らかに類似した関係であり多大な影響を及ぼした」と、アダムズは述べている。彼女によれば、「コミュニティの福祉」は「相互の努力に依拠した公共的な責任」において成立していると言う。彼女は、「コミュニケーションが破壊され虚ろな状態では、一般的な社会的知性は眠ったままであり」、その回復には「公共的なものを媒介とする」必要があると語ったデューイの発言を紹介して、それが社会福祉における「キャッチフレーズのひとつ」になっていると主張した<sup>19</sup>。

祝賀会の最後には、デューイが全体に対して謝辞を述べる形式で終わっている。これらの講演は、『ジョン・デューイの人と哲学—70歳の誕生日を記念してニューヨークで行われた講演』(1930年) としてハーバード大学出版から公刊されただけでなく、雑誌『ネーション』や『ニュー・リパブリック』、あるいは『ニューヨーク・タイムズ』や『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』などの新聞にも、デューイの誕生日を讃辞する論説と記事が掲載された<sup>20</sup>。

70歳を迎えたのと前後して、デューイは、1904年にシカゴ大学から異動して以来勤め続けたコロンビア大学を退官することを願い出た。デューイは、大学学長のニコラス・バトラー (Nicholas Murray Butler) <sup>21</sup> と話し合い、辞表を受理してもらう代わりに、哲学の名誉教授に就任し、それまで居住して

きた大学構内のモーニングサイド・ハイツに留まって、引き続き研究と大学院生への指導を行うことを受諾した。そして、1930年3月3日、評議会で辞表が受理され、6月30日にコロンビア大学を退官した<sup>22</sup>。

### 3. コミュニティ・スクールの構想と実践

デューイの学校改革の実践的影響について考える上で、彼のコロンビア大学での教え子であるエルシー・クラブによる試みは一つの示唆を提供するものである。クラブは、1907年から1912年にかけて、ティーチャーズ・カレッジでデューイの指導を受けて教育哲学の研究に従事した。彼女はまた、デューイの授業のティーチング・アシスタントとして彼の講義を支える過程で、進歩主義の教育理念に共鳴し、コミュニティを基盤にした学校改革の必要性を認識するようになった。1939年にクラブが自らの実践について記した著書『コミュニティ・スクールの活動』を著した際には、デューイはその前文を執筆している<sup>23</sup>。

クラブは、1923年にキャロライン・プラット (Caroline Pratt) のシティ・アンド・カントリー・スクールの教師として迎え入れられた。進歩主義学校の推進力の一翼を担ったこの学校で、クラブは、プラットや、ルーシー・ミッチェル (Lucy Sprague Mitchell)、ハリエット・ジョンソン (Harriet Merrill Johnson)、ウィリアム・ゾーラック (William Zorach) らと交流を図り、子ども中心のコミュニティとしての学校のあり方を学び取った。シティ・アンド・カントリー・スクールは、デューイの学校のヴィジョンを実践する革新的な試みを展開していた。クラブは、そこでの経験を通して、進歩主義学校の価値を確信し、「コミュニティ・スクール」の構想を獲得するに至った。

その一方で、シティ・アンド・カントリー・スクールの挑戦は、改革の難しさも表現していた。進歩主義学校の歴史を研究したサム・スタック (Sam F. Stack Jr.) は、クラブの言葉を引用して、彼女がミッチェルとともに「プラットを大いに尊敬し敬い」、その経験から「多大なものを学習し恩義を

感じていた」一方で、質問や議論を受け付けられないような「プラットへの服従を強いる態度は不快である」と考えていた点を指摘する。スタックが引用したクラブの表現に従えば、「大学卒ではない図工教師であり」、「アカデミックな訓練への軽蔑」を表していたプラットは、「自分（クラブ）とデューイ博士との協同を嫌悪していた」と述べている。1924年、クラブはデューイと交わした相談に触発されて、シティ・アンド・カントリー・スクールを去り、コネチカット州グリニッチのローズマリー・ジュニア・スクール (Rosemary Junior School) に移ることを決めた。彼女はそこで、進歩主義の学校改革に取り組み、1929年まで勤務した<sup>24</sup>。

1939年に公刊されたクラブの『コミュニティ・スクールの活動』では、ケンタッキー州ジェファーソン・カウンティのロジャー・クラーク・バラード・メモリアル・スクール (Roger Clark Ballard Memorial School) と、ウエスト・ヴァージニア州リーズヴィルのアーサーデール・コミュニティ・スクール (Arthurdale Community School) という自身が改革に着手した二つの学校について叙述されている。彼女によれば、ロジャー・クラーク・バラード・メモリアル・スクールにおいて「コミュニティ・スクールの本質と機能」を理解するようになり、アーサーデールにおいて「コミュニティ・スクールを構築し、学校をコミュニティ教育のエージェンシーとして利用した」と捉えている<sup>25</sup>。

クラブは、1929年から1934年にかけて、ロジャー・クラーク・バラード・メモリアル・スクールの校長職を務めた。彼女は、「コミュニティ・スクールの概念形成」について次のように述べている。

私たちとともにあるコミュニティ・スクールの観念は、バラード・スクールと状況が提供した機会から生じたものである。それは最初から、学校とはどのようなところであり、何をするとところなのかという事柄に関わる観念である。それは、部分的には教育が人びとの生活において真に機能するという欲求から生じたものであり、また、部分的にはアメリカについての

増大する感覚と、文化と資源と地域的な相違を利用することへの関心から生じたものである。私たちとともにあるその観念は、ジョン・デューイが40年も前から表現していた社会的制度としての学校概念の理解を活気付ける田舎のコミュニティにおいて作用する経験が必要としている。ある意味で、私たちはそれをケンタッキーから、あるいはケンタッキーにおいて成し遂げた試みから学んだのである<sup>26</sup>。

クラブは、この学校のプログラムについて叙述している。彼女によれば、授業では「ケンタッキーの生活と歴史の様々な段階」に焦点を当てたことが報告されている。その「目的」は、「子どもたちとともに彼らの生活理解の基盤を獲得する」ことに置かれていたと言う。具体的な学習内容として計画されたのは、1年生の「農業学習」、2年生の「村のコミュニティの学習」、3年生の「インディアンの生活の学習」、4年生の「ケンタッキーに入植した家族の経験の追体験」、5年生の「今日の過去の時代における輸送機関の学習」、6年生の「イギリス人、フランス人、スペイン人の地域への入植の学習」と「ギリシア語とラテン語の学習」、7年生の「州の歴史の学習」、8年生の「蒸気と電気の力の導入と、機械へのその適用に始まるケンタッキーの歴史」の学習、9年生の「古代史」の学習などであった。

クラブによれば、ケンタッキーのこのコミュニティ・スクールにおいては、学校と家庭と近隣の関係が重視され、教師は学校の近くに居住し地域との交流を図っただけでなく、保護者たちが学校の仕事を共有し協同して子どもたちを育てることに従事したと紹介されている。彼女は、「コミュニティ・スクールの基盤は共有の原理である」と言う。そして、「社会的に機能する学校」は、「コミュニティの人びととの協同的な働き」と「子どもと大人の生活を効果的にするコミュニティの問題と必要性に関するすべての教育的エージェンシー」を「企ての本質的部分として想定する学校」であると主張している<sup>27</sup>。

1934年から1936年にかけて、クラブはアーサーデール・コミュニティ・

スクールの主事として尽力した。アーサーデールは、1933年にローズヴェルト (Franklin D. Roosevelt) 政権下で制定された産業復興法の一環としてのホームステッド支援政策によって、連邦政府からの公的な援助を受けた地域である。アーサーデール・コミュニティ・スクールの実現には、ローズヴェルト夫人のエレノア・ローズヴェルト (Anna Eleanor Roosevelt) が多大な影響力を及ぼした。もともと教師をしていた彼女は、1933年8月18日にスコッツ・ランを訪問して、不況に喘いでいた炭鉱労働者とその家族たちの惨状を目の当たりにした。その報告を受けたローズヴェルト大統領は、都市から農村への移住の促進を目的に据えて、ホームステッドの支援政策を推進した。アーサーデールは、150の家族を対象にして、ニューディール期の最初のホームステッド・コミュニティの一つとして選定されたのである。1935年10月16日、エレノア・ローズヴェルトは、31日にホワイトハウスで開催予定のアーサーデール・コミュニティ・スクールの助言委員会 (Permanent Advisory Committee) への出席をデューイに依頼している<sup>28</sup>。だが、デューイは11月1日にクリーブランド美術館で講演が予定されていたため、この会議に参加できない旨を大統領夫人に伝えている<sup>29</sup>。

クラブは、アーサーデール・コミュニティ・スクールの哲学として、以下の点を指摘している。第一は、「民主主義への信仰」であり、「民主主義の手続きが学校の行政活動と教授活動を支配する」ことである。第二は、「民主主義と自由が自己実現への挑戦」になり、人びとの「本当の進歩は彼らの自発性と識見の結果」であるという事実を強調することである。第三は、子どもという存在を「無限の可能性を持った個人」として理解する点である。第四は、学校が「感情的、知性的、個性的な特徴における多様な市民性」を前提にした上で、「コミュニティ生活への調和的な適応を認めるような生徒の個性の維持を目的とする」ことである。第五は、学校の活動において、「生徒たちが完全でかつ幸福に生活する」ことを目標に据えて、「個人と、特に責任を持ったグループの協同的な努力による創造表現の広範な機会」を提供することである。

クラブによれば、学校のカリキュラムは、「伝統的で公式的な学習指導要領」や「標準的な学年制や生徒のグループ分け」に規定されるのではなく、「コミュニティの特別な必要性」を基盤にするべきだと考えられていた。「コミュニティの活動」は、「子どもたちが教育的経験を獲得する実験」から構成されるものと見なされていた。また、学校行政においても、「伝統的に継承している事柄」よりも、「生徒とコミュニティの必要性」が中核に置かれていたと述べている<sup>30</sup>。

『コミュニティ・スクールの活動』の前文の中で、デューイは、クラブのコミュニティ・スクールの実践を擁護し高く評価している。彼は、同書の公刊に喜びを言い表し、アーサーゲールの学校に自らが訪問したときの「最も楽しかった視察」を回顧させ、「著者との数多くの刺激的な会話を鮮やかに思い出させる」ものであったと評している。デューイは、同書を「コミュニティ教育学の分野における非常に重要な試みの記録」と捉えたとすれば、「それ以外の他の作用の分野があるかのように聞こえるであろう」が、「実際にはそうしたものは存在しない」と書いている。彼によれば、「もし学校がコミュニティ・スクールの名に値するものであれば、そこではすべてのことが言われたことになる」のであり、同書は「この機能を遂行する学校の観点に関わる事柄」を正確に描出したものであると解説している。

デューイは、「今日、学校の社会的機能については、非常に多くの事柄が主張される」が、同書は「実際に行いどのように行ったのか」を記述した点で重要な意義を持つものであると主張する。その「第一の教訓」は、「学校がコミュニティの目的のためにコミュニティにおいて機能するときのみ、学校は社会的に機能する」ということである。彼によれば、「学校はコミュニティの生きた部分」であり、学校とコミュニティの関係は「双方向的な過程」であると見なしている。デューイは、クラブの著作が「民主主義の生き方を構築するのに教育が果たす役割を実践したことの証明となるものである」と述べている<sup>31</sup>。

デューイはまた、1939年10月21日にクラブに手紙を出している。手紙の



中で彼は、『コミュニティ・スクールの活動』について、「教育的資源の主題に関する注目に値する書物」であり、「次の段階」としては、「教育者が教育目的のために自分たち自身のコミュニティの資源の重要性を把握する」ことが重要であると伝えている<sup>32</sup>。

おわりに

以上、デューイのコミュニティ・スクールの構想とその実践的影響について明らかにしてきた。彼は、活動的な学習を主体とした子どもたちのコミュニティの構築を学校改革の中心課題に位置付けて考えていた。特に、1930年代の彼は、変化する社会状況に直面する中で、進歩主義学校の再構築を模索し、コミュニティを成立基盤に据えた革新的な学校の構想を提示していた。それが教育に与えた実際的貢献については、70歳を迎えたデューイの祝賀会におけるニューロンやムーアらが述べた講演からも推察できる。ニューロンが積極的に評価したように、デューイにおいて教育行政やカリキュラム開発の主体は、学習者の外部に設定されるのではなく、教師と子どもと親たちを取り巻くコミュニティの実践に置かれていた。

また、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジにおけるデューイの教え子であるクラブの試みは、その重要性を具体的に示していると言える。彼女による教育の実践は、ロジャー・クラーク・バラード・メモリアル・スクールとアーサーデール・コミュニティ・スクールという二つの学校で開花した。クラブの改革は、子どもたちの活動的なコミュニティを基盤にした新しい学校のヴィジョンを表現していた。その実践は、デューイが『コミュニティ・スクールの活動』の前文で指摘したように、コミュニティと民主主義の思想に貫かれていた。1930年代のデューイのコミュニティ・スクールの構想の影響は、このような学校改革の中に見て取ることができよう。

## 注

- 1 Dewey, John, *The School and Society*, in *John Dewey: The Middle Works*, vol.1, edited by Boydston, Jo Ann, Carbondale, Southern Illinois University Press, 1976. (以下、デューイの著作集 *The Middle Works* からの引用は *MW*、*The Later Works* からの引用は *LW* と略し巻数を示す。)
- 2 Dewey, John, *Democracy and Education*, *MW*, vol.9.
- 3 Dewey, John, *Experience and Education*, *LW*, vol.13.
- 4 Dewey, John, "Why Have Progressive Schools?," *LW*, vol.9, pp.147-157.
- 5 Dewey, John, "Shall We Abolish School "Frills"? No," *LW*, vol.9, pp.141-146.
- 6 Dewey, John, "The Activity Movement," *LW*, vol.9, pp.169-174.
- 7 Dewey, John, "Growth in Activity," *LW*, vol.11, pp.243-246.
- 8 Dewey, John, "What is Learning?," *LW*, vol.11, pp.238-242.
- 9 リンヴィルは、ハーバード大学で修士の学位を取得した後、ニューヨーク市のデウィット・クリントン高等学校とジャマイカ高等学校で生物教師として教鞭を執る傍ら、1916年にニューヨーク市の教員組合の委員長となり、1935年まで役職を務めた。また、1931年から34年にかけて、アメリカ教員連盟 (American Federation of Teachers) の委員長も務め、連盟の機関紙である『アメリカの教師』の編集にも携わった。デューイが1920年代にニューヨーク市教員組合で講演を行って支援を続け、また30年代には『アメリカの教師』に論稿を寄せいているのも、デューイとリンヴィルの親交から来るものと見ることができよう。(Linville, Henry, R, *The Biology of Man and Other Organisms*, New York: Harcourt, Brace, 1923.)
- 10 Dewey, John, *John Dewey: The Man and His Philosophy, Address Delivered in New York in Celebration of His Seventieth Birthday*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1930.
- 11 ウェストウッドにある UCLA の教育大学院の建物は、ムーアを称えて1935年にムーア・ホールと呼び名を変え、現在でもその名称が用いられている。また、教育に関するムーアの代表的な著作には、以下のものがある。(Moore, Ernest Carroll, *What Is Education?*, Boston: Ginn, 1915. *Fifty Years of American Education: A*

- Sketch of the Progress of Education in the United States from 1867 to 1917*, Boston, New York: Ginn and Co., 1917. *How New York City Administers Its Schools a Constructive Study*, New York: World Book, 1913.)
- 12 Dewey, John, *John Dewey: The Man and His Philosophy, Address Delivered in New York in Celebration of His Seventieth Birthday*, op. cit., pp.6-36.
- 13 アメリカの教育行政学の歴史的展開について研究した中谷彪によれば、「デューイ一派の左派の論客」として一翼を担ったニューロンは、「民主的な信念」に基づいて「社会改造のための教育行政学の構築を企図した」と述べている。(中谷彪『アメリカ教育行政学—ニューロンとカウンツ』溪水社, 1998年, pp.64-70.)
- 14 Dewey, John, *Moral Principles in Education*, MW, vol.4, pp.265-291.
- 15 Dewey, John, *John Dewey: The Man and His Philosophy, Address Delivered in New York in Celebration of His Seventieth Birthday*, op. cit., pp.37-64.
- 16 Ibid., pp.65-74.
- 17 社会心理学者でありプラグマティストとしても顕著な活躍を示したミードは、哲学、心理学の講師として招かれたミシガン大学でデューイと同僚になり、1894年という同じ年にデューイとともにシカゴ大学に赴任した縁もあり、その当時は互いに隣同士に住み、家族ともども相互に行き来しない日がなかったほどに親交が深かった。また、研究上においても相互に刺激し合い、デューイは多大な影響をミードから受けている。1931年の4月26日にミードが他界すると、デューイはシカゴ大学構内のボンド教会で行われた彼の葬儀で、追悼講演を行った。彼はそこで、ミードとの友人関係が「最も貴重な所有物」であり、彼の死に至っても「その力を削ぐことも実在を曇らせることもない、かけがえのない記憶」となって生き続けると話している。(Dewey, John, "George Herbert Mead as I Knew Him," LW, vol.6, pp.22-28.)
- 18 Dewey, John, *John Dewey: The Man and His Philosophy, Address Delivered in New York in Celebration of His Seventieth Birthday*, op. cit., pp.75-105.
- 19 Ibid., pp.140-143.
- 20 Ibid.
- 21 バトラーは、1902年コロンビア・カレッジの学長に就任し、その後コロンビア大

学へと発展させて1945年まで学長の座を務めた。彼は平和運動に深く関与し、国際平和のためのカーネギー財団の創設に寄与した。バトラーの成果は、デューイがコロンビア大学を退官した翌年の1931年に、アダムズとともにノーベル平和賞を受賞したことに見て取ることができる。

22 デューイはまた、1930年の11月にパリ大学から名誉博士の学位が授けられ、その間パリとウィーンに滞在した。さらに彼は、1932年の6月にはハーバード大学からも法学博士の学位が授けられた。

23 Clapp, Elsie Ripley, *Community Schools in Action*, Arno Press, 1971.

24 Stack, Sam F., *Elsie Ripley Clapp (1879-1965) : Her Life and the Community School*, Peter Lang, 2004, pp.125-137.

25 Clapp, Elsie Ripley, *Community Schools in Action*, op. cit., p.3.

26 Ibid., p.48.

27 Ibid., pp.21-65.

28 Eleanor Roosevelt to John Dewey, October 16, 1935, *The Correspondence of John Dewey*, vol.2: 1919-1939, edited by Hickman, Larry A., InteLex Corporation, 2005.

29 John Dewey to Eleanor Roosevelt, October 24, 1935, *The Correspondence of John Dewey*, vol.2: 1919-1939, edited by Hickman, Larry A., InteLex Corporation, 2005.

30 Clapp, Elsie Ripley, *Community Schools in Action*, op. cit., pp.72-74.

31 Dewey John, "Forward," Clapp, Elsie Ripley, *Community Schools in Action*, op. cit., pp. vii- x .

32 John Dewey to Elsie Ripley Clapp, October 21, 1939, *The Correspondence of John Dewey*, vol.2: 1919-1939, edited by Hickman, Larry A., InteLex Corporation, 2005.